

寄稿

# 成長して輝く瞬間の尊さ

青森県立中央病院 成育科副部長 大瀧 潮 医師

私は、医学部五年生の時に、療育センターに研修で訪れました。その時に話しかけてきた車椅子に乗った男の子が、親から離れて「自立している」姿にとても驚きました。手足が不自由なのに、早くも親から離れているとはすごいな、と当時の私は浅はかな考えしか持っていました。

◆◆◆◆◆  
子どもたちが病院で治療を終えた後の生活・就学・進学を支えたいという独考（ひとりかんがえ）で、施設医師を目指し東京に行きました。幸運にも、都立病院やその後の療育施設（社会福祉法人 日本心身障害児協会 島田療育センター）では、小児や重症心身障害児者の診療を丁寧な根気強く指導いただきました。

しかし、障害を抱えながら生きることは想像以上に苦しく、幾度も大きな選択をしなければならぬ本人と家族の前に、なすすべもなく立ち尽くすだけの場面もありました。「自立する」という状況も一人一人異なりま

◆◆◆◆◆  
す。単なる親からの独立だけでなく、支援者に理解してもらいながら、当事者が思うようにならない体を維持して生活する覚悟を間近で見せて頂きました。そして親御さんが子離れする苦悩も目の当たりにして、医療だけでは解決し得ない「生きる」との深さを教えて頂きました。

◆◆◆◆◆  
療育の日常では、患者さん本人や介護者・支援者から「ただ聞いてほしい」ということがしばしばありました。

医師の立場としては解決策を提案したくなるのですが、その提案すらも患者さんや支援者の負担になってしまいう時もありました。本当はご自身がどうしたらよいのか、答えを持っていたのではないかと推察します。葛藤し悶々と悩むことも、その方の人生をより豊かにする大事な時間なのかな、と思うこともありました。

◆◆◆◆◆  
私が療育に関わることを魅力的な役割だと思うのは、「成長したときに輝く」場面に居合わせることができからです。この場面を知ること、通院する子どもはもちろん、親のこどもへの眼差しや声かけが変わっていきます。そして支援する医療職、福祉職、リハビリスタッフもキラキラと変わっていく場面に何度目も出くわし、心を動かされました。誰かの健康や成長を一生懸命考え祈ることが、人を輝かせるのでしょうか。

◆◆◆◆◆  
ご縁があり、二〇二〇年の春から青森県の療育センターで障害医療の末席につかせて頂くことになりました。

多くの方々に療育の魅力をお伝えしながら、「輝く瞬間」をぜひ共有していければと思います。

ようこそ！青森県へ



大瀧潮（おおたきうしお）先生は、今年3月まで東京都多摩市の「島田療育センター」に勤務し、「医療的ケア」が日常的に必要な子どもたちを対象に在宅支援などを行ってきました。

4月より県立あすなろ療育福祉センターで、週3回来て診察をしています。